
予言者の憂鬱

灰谷爽治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予言者の憂鬱

【Nコード】

N3312T

【作者名】

灰谷爽冶

【あらすじ】

ある街にいる二人の占い師。片方は人気者、もう片方は嫌われ者。正反対の予言をする二人の、数奇な運命の物語。

むかしむかし、あるところに二人の占い師がいました。

ひとりはよく当たると評判で、優しく柔らかな物腰であることも加わり、人々からとても人気がありました。

貴族や王族からの依頼を受けることも多く、予言を当ててはいつも高い報酬を得ていたのです。

もう一人はとても評判が悪く、みすばらしい恰好をしておりました。そちらの占い師の予言は当たらないうえに、いつも依頼人に対して、嫌なことばかりを告げるのです。

同じ町で同じことを生業とする二人のことを、町の人々は「善い占い師」、「悪い占い師」と呼び分けておりました。

ある日、善い占い師のもとに二人の男女がやってきました。

この街の領主の娘と、その護衛騎士でした。

二人は恋仲でありました。

身分違いの恋を成就させるにはどうしたらいいか、善い占い師の元に相談にきたのです。

人を愛する心は何よりも強い。

決してあきらめることなく、二人で運命を切り開かなければならぬ。

忍ぶ恋に苦しむ二人を、善い占い師はそう言って励ましました。

希望を捨ててはならないという占い師の言葉に、二人は勇気づけられたのです。

互いのことを本当に想うならば別れてしまつべきだ。

冷たい声を投げつけたのは、そこを通りかかった悪い占い師でした。道ならぬ恋に溺れることは破滅の始まりである。

愛こそが人を殺す。

恋人の将来を案じるのなら、この恋は終わりにするのが身のためだ。告げられた言葉に、領主の娘は涙を浮かべ、護衛騎士は激昂して剣を抜きます。

首筋に刃を当てられても、悪い占い師は平然としており、別れる方が得策であると繰り返し返しました。

斬りつけようとする騎士を引き留めたのは、恋人である領主の娘でした。

怒りのおさまらない騎士でしたが、愛しい女と善い占い師のとりなしにより、ようやく事なきを得ました。

私たちは決してあきらめない。

帰り際に、領主の娘は二人の占い師に言いました。

恋人である騎士に抱きかかえられ、瞳を潤ませながら。

宣言通り二人は密かに心を通わせあっておりましたが、季節がひとめぐりする頃には、二人の恋は終わっておりまし。

騎士が死んでしまったためです。

自分との仲を認めてもらうためには武勲をあげるしかない、騎士は国境で起こっている紛争に、志願兵として赴き、命を落としたの

でした。

娘の悲しみは深く、ふさぎ込みがちになってしまいました。食べることも寝ることも忘れたように、部屋の中で一日中泣いているのだと、善い占い師のもとに相談にやってきたのは、娘の父親である領主でした。

娘の心の傷を癒すにはどうしたらよいのか。

途方に暮れる領主に、善い占い師は告げました。

あなたの心が伝われば、きっと彼女の心も元気を取り戻すでしょう。出来る限りの励ましを、お嬢様に贈られるがよい。

大きくその言葉に頷く領主でしたが、そこを通りかかった悪い占い師の呟きに顔をゆがめました。

娘の恋の傷を、どうして父親が癒せるものか。
なにもせずにそっとしておくのが一番良い。
身の丈に合わぬ献身は破滅を呼ぶ。

おまえは無力であると言わんばかりの悪い占い師の言葉に、領主は大いに憤慨しました。

その場で首をはねようとしたが、やはり、悪い予言者は顔色一つ変えないのでした。

本当に未来を知っているかのようなその様子が、かえって不気味に思われた領主は、ただ鼻を鳴らしてその場を去りました。

領主は娘の心を慰めるために、あらゆる手を尽くしました。実は領主は、娘と護衛騎士の恋を知っていたのです。

身分の違いをわきまえず、己の娘に懸想する騎士のことを、領主は嫌悪しておりました。

紛争地へ赴くことを騎士が志願したとき、最も危険な場所に彼を派遣したのは、他でもない領主本人だったのです。

その罪悪感も手伝って、領主は際限なく、娘のために金を使いました。

豪華な宝石や宮殿を与えたり、腕のいい画家に絵を描かせたり、音楽家や貴族を招いてパーティーを何度も。

しかし、どんなことをしても娘の心が晴れることはありませんでした。

金をかけたことでしか、領主は娘を慰める術を知りません。金が足りなくなると、領主は領民にかける税を引き上げ、娘のために使いました。

近年でも稀な不作に見舞われたある年、重税に苦しむ平民はとうとう決起し、領主への反乱を起こしました。

大勢の反乱軍が領主の城に押し寄せ、領主はその首をはねられ、殺されたのでした。

この暴動により、父親が自分にどれだけ心を傾けてくれたのか、娘はようやく知ることとなりました。

娘は徴収した税を領民に返し、父親の跡を継いで領主となりました。領主は己の側近として、善い占い師を雇いました。

領主は善い占い師のことを、とても信賴していました。

善い占い師の言葉が己を励まし、己の目を覚ましてくれたのだと思
ったからです。

領主の城へと善い占い師が発つその日、悪い占い師は彼に告げま
した。

ゆめゆめ忘れぬように。

愛こそが人を殺す。

莫迦の一つ覚えのように、同じ言葉を繰り返す悪い占い師を、善い
占い師は鼻で笑いました。

領主は美しい女性となっております。

城では質素な生活を心掛け、領民を大切にしました。

彼女のことを、父王を誑かし贅の限りを尽くしていた悪女だと思っ
ていた領民は、誤解を恥じて彼女を敬うようになりました。

流れた月日のせいにか、彼女にはもう、護衛騎士と恋をしていた頃の
可憐さはありませんでした。

代わりに彼女が纏うのは、支配者としての威厳と領民への慈愛。

そして領主は孤独でした。

大切なものを失った悲しみは未だ癒えず、また心の奥には、誰にも
吐き出せない苦悩を抱えていたからです。

事情を知る良い占い師は、懸命に彼女を支えました。

いつしかそれが、恋心に変わるほど。

政務に疲れた領主が、お忍びで悪い占い師を訪れたのはそんなとき

でした。

悪い占い師は相変わらず、みすばらしい恰好をしていました。貧民街の裏路地に座っていた悪い占い師は、領主の姿を認めて何をしに来たのかと尋ねました。

領主は悪い占い師に、己の未来が見えるかと聞きました。悪い占い師は即座に、孤独な死が見えると告げました。

やはりおまえはいつも正しい。

切なそうな笑みを浮かべて、領主は言いました。

だがおまえは、占い師としては失格だ。

人に必要なのは真実ではない。

言葉を続ける領主をまっすぐ見つめて、悪い占い師はまた尋ねました。

希望は、あなたの心を救ったか。

領主はその質問に、答えることができませんでした。

ただ、どこまでも人を見透かし、真理を見据え続けているかのよう
な悪い占い師の瞳を、領主は美しいと思ったのでした。

領主の心が、自分でない誰かを扱ひ所としだしたことを、善い占い師はすぐに悟りました。

その相手が悪い占い師であると知り、善い占い師は激しい憎悪を抱くようになりました。

ぼろを纏つても人に蔑まれても、ただ真実だけをいつも告げる悪い占い師のことが、善い占い師は前々から目障りでした。

悪い占い師は善い占い師にとって、己の言動の虚ろさを映す鏡だったのです。

善い占い師はすぐさま、悪い占い師に貴族の馬を盗んだという、ありもしない濡れ衣を着せて投獄しました。

この街では馬泥棒は斬首に値する重罪です。

処刑の日を翌朝に控えた夜、領主は牢屋に閉じ込められた、悪い占い師のもとにやって来ました。

逃げろ。

言いながら、領主は牢獄の鍵を開きました。

無駄なことだ。

逃げたところですぐに見つかってしまう。

そのように考える悪い占い師に、後のことはこちらに任せると領主は続けます。

どうか生きてほしい。

おまえをここで死なせるわけにはいかない。

領主の声にはえもいわれぬ何かがあり、悪い占い師が抗うことを許

しませんでした。

押し切られるように、悪い占い師は牢獄を逃げ出しました。

領主は悪い占い師の服を、背格好の良く似た、死んだ奴隷に着せました。

そうして、悪い占い師は獄中死したものとして処理されました。

しかし、領主にこの手引きをさせることこそが、善い占い師の計略でした。

危惧が確信に変わったとき、善い占い師は嫉妬に怒り狂いました。

愛する領主が悪い占い師を想っているということに、善い占い師は耐えられなかったのです。

善い占い師は領主に詰め寄り、脱獄を手引きしたことを咎めました。身体の後ろに隠した手の中に、短剣を握りしめて。

果たして領主はあっさりと、悪い占い師を逃したことを認めました。

9

無実の罪で投獄された者を逃がしたただけだ。

おまえはあの男の何を恐れている。

まっすぐに己を見つめて尋ねてくる領主に、善い占い師は己の胸を掻きむしって叫びました。

何故わたしを見てくれないのですか。

何故、わたしの声はあなたに届かないのですか。

領主は支配者の残酷さで、善い占い師に返しました。

人を導くのは無意味な甘言ではなく、真実を見据える勇気だ。
お前の言葉は人を励ますだろうが、決して人を、運命から救いはしない。

善い占い師は涙を流しながら、隠し持った短剣を領主に見せました。

殺したければ殺すがいい。

おまえの心がそれほどまでとは知らなかった。

領主は逃げも隠れもせず、善い占い師が、己に向かって短剣を振り上げるのを眺めていました。

ところが、領主の覚悟した瞬間は来ませんでした。

刺されると思った刹那、善い占い師は硬直し、どう、とその場に倒れたのです。

床に伏した身体の下には、みるみるうちに赤い水たまりができていききました。

代わりに領主が姿を認めたのは、己が逃がしたはずの悪い占い師でした。

彼の手には、赤いしずくを滴らせる長剣が握られていました。

悪い占い師がそれを投げ捨てた瞬間、領主は思わず彼に抱きつきました。

枯れたはずの涙が、領主の頬を濡らしました。

血濡れの両手に逡巡した後、悪い占い師はそっと、領主の身体を抱

き返しました。

だから言っただろう。
愛が人を殺すのだ。

瞳に光をなくし、骸と成り果てた善い占い師に向かって、悪い占い師は寂しそうに繰り返すのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3312t/>

予言者の憂鬱

2011年5月23日05時54分発行